

読書のすすめ

立志館ゼミナールから、この夏おすすめの本を紹介いたします。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

妖怪の子預かります

千代田校 中本先生
廣嶋 玲子(ひろしま れいこ) 創元推理文庫

私の名は千弥。この物語の主人公、弥助の養い親をしている。目の不自由な按摩です。弥助は幼い頃に私が山の中で拾った子で、私以外の者とは口がきけません。しかし私にとってはかけがえない少年なのです。そんな弥助がある過ちを犯し、その償いとして妖怪の子預かり屋を命じられてしまいました。さまざまな妖怪の子たちに翻弄される日々が始まりました。

子預かり屋の仕事を見守るうち、私は弥助の変化に気づきました。不思議にも、弥助は妖怪たちとであれば口がきけるようになります。そして弥助もまた、私の変化に気づき始めています。弥助が妖怪の子を預かるようになって以来、夜ごと私が姿を消していることに……。

弥助が全てを知る日が、近づいているのかもしれない。みなさん、私の大切な少年を励ましてもらえないでしょうか。

世界クッキー

春木校 向井先生
川上 未映子(かわかみ みえこ) 文春文庫

言葉というのは、とても不思議なものです。とまり合う言葉や、その使われ方によって、がらりとイメージが変わります。たとえば、この本のタイトル「世界クッキー」、まさか「世界」と「クッキー」がとまり合わせる。「世界クッキー」ってなんだ？ 見慣れた言葉が、新しいものに感じられませんか？

筆者は、なんでもない日常を言葉という型で切り抜いておいしいクッキーにしてみました。そんな感性の人。ポリウレムのある髪の毛を持つ母親に「頭に大きめの猫をくっつけてるんじゃないの」とつつこんでみるなど、日々の

悩みやできごとから言葉について思うことを、筆者独自のくだけた文体もあいまっておもしろおかしく書かれ、するすると読めてしまいます。文章を読むことが苦手という人にこそおすすめのもの、考えるのでなへ、感ごぬ一冊。



三日間の幸福

三國丘校・中百舌鳥校 高石先生
三秋 隼(みあき すぎる) メディアワークス文庫

どうやら俺の人生には、今後何一つ良いことがないらしい。未来を悲観して寿命の大半を売り払った大学生のクスノキは、僅かな余生で幸せを掴もうと躍起になるが、何をやっても裏目に出てしまう。空回りし続ける俺を「監視員」のミヤギがただ醒めた目で見つめている。俺が一番の幸せに気付いた時、既に寿命は二か月を切っていた。

誰かにとっては価値がなくても、自分にとってはとても大切なことなのではありませんか。価値をつけるということはとても難しいことなのかもしれません。特に、人生においては。日々悔いを残さずに生きようと思わせてくれる一冊です。

風の中のマリア

大小路校 小山先生
百田 尚樹(ひやくた なおき) 講談社文庫

オオスズメバチのワーカー(働き蜂)であるマリアが、成虫になってからの、「三十日間の一生」を描いた作品です。メスばかりの巣の中で、マリアはひたすら餌を狩り続けます。そして、一族の中でも一流の「戦士」に育ちます。やがて季節が進むことで、自分と巣や女王バチの「運命」を知ることになります。

小説でありながら、他の昆虫とは違うハチの特殊な生態を詳しく知ることが出来ます。それ以上に「自分なぜこの世にいるのか」「人はなぜ勉強するのか」などの疑問に対して、答えそのものは教えてくれませんが、答えを出していく方法を知ることが出来ます。少なくとも私は答えが出ましたよ。



おんぶにだっ!

泉佐野校 田中先生
さくら ももこ 集英社文庫

ももこは、二歳になってもなかなか乳離れできず、いつも母親にべったりでした。しかし、父親が事故に遭い、母親が病院で寝泊まりすることに。ももこは初めて一人で留守番をします。その時の寂しい気持ちなど、幼少期に皆さんも味わったことのあるような、子供独特の感性が伝わる作品です。

この本は、「ちびまる子ちゃん」の作者であるさくらももこさん自身の幼い頃、「まる子」以前の頃の、ピュアな気持ちが綴られた文章で、読んでいて懐かしいような、ほっとするような、そんな気持ちになってくれる本です。

よるのげけもの

和泉校 丸山先生
住野 よる(すみの よる) 双葉文庫

——よるになると僕は化け物になる——

化け物になった安達は夜の学校に忍びこむ。そこにいたのはクラスメイトの矢野さつき。いじめられっ子。普段なら「関わってはいけない」彼女がなぜか夜の学校にいた。彼女の目的は「夜休み」を満喫すること。そこから風の「俺」、夜の「僕」のそれぞれの「自分」と矢野さつきとの付き合いが始まる。

「正しい行動」をとることに全力を注ぐ風の「俺」。矢野さつきのことを深く知っていく夜の化け物の「僕」。どっちが本当の自分？ 本当の自分はどっち派？

「やっと、会え、だね」矢野さつきの言葉の意味するところは……。話の中身が面白いのはもちろん、重いテーマを重く感じさせない構成で、読み返せば読み返すほどに作者の意図が読みとれる面白い作品です。ぜひ、表現の奥にある深さを味わってみてください。

あ、この化け物、火を吐きます。

ツバキ文具店

深井校 久常先生
小川 糸(おがわ いと) 幻冬舎文庫

代々伝わる小さな文具店を営みながら、手紙の代筆を請け負う主人公の鳩子。先代である祖母に小さなころから厳しく育てられた鳩子にとって、祖母との思い出は決して良いものとは言えませんでした。

そんな彼女のもとに、様々な依頼が舞い込みます。友人への絶縁状や、ペットのお悔やみへの返事、天国からの手紙……。書きたくても身近すぎて書くことができないという依頼者の心に寄り添い、その依頼者自身になりきって手紙を書くのです。そうやって代筆をしていくうち、鳩子自身も今は亡き祖母の思いに気が付き始めていきます。

今ではLINEや電話で用事を済ませ、手紙を送ることはほとんどなくなつたような気がします。そして、相手が身近な人であればあるほど、書かないものですよ。でも、この話を讀んだ後は、「大切な人に手紙を書きたいな」と思うようになるはず。主人公は大人の女性なので、中学生の皆さんにはまだ少しピンとこないところもあるかもしれませんが、「大切な人への大切な思いに気付く」ことは出来ると思います。ぜひ読んでみてくださいね。きつと、手紙を書きたくなるはずですよ。



愛なき世界

貝塚校 山本先生
三浦 しをん(みづら) しをん) 中央公論新社

自分の恋のライバルが「植物」だと聞かされたら？

藤丸陽太が見習い修行中の洋食屋「円服亭」に時々食事をしてくる本村紗英は植物の世界に魅入られた女性で、恋愛よりも気になることはシロイヌナズナの葉の形や大きさばかり。でも、植物のことや自分の実験のことを楽しそうに話す紗英に陽太はだんだん惹かれていきます。はたして陽太の恋の行方は。そして紗英の実験は成功するのか。

脳も心臓もない、「愛なき世界」である植物をテーマに綴られたこの小説は、愛にあふれた優しい世界。そして、一つのこと

に真剣に打ち込むことの大切さを教えてくれます。

きのう、火星に行った。
三田市校 八百先生
笹生 陽子(やそう) ようこ) 講談社文庫

「信じられるか？」 山口拓馬。悪いけど、いま、おれは本気だ。」 友達はいらない、ヤル気もない、クールにきめていた主人公の山口拓馬が、本気を出して取り組むことのすばらしさを心の底から実感するまでを描いた成長物語です。突然、七年ぶりに療養先から戻ってきた病気がちの弟や、ひょんなことから一緒に体育大会のハードル選手となった「でくちゃん」とのかかわりを通して、山口拓馬の中に本気が芽生え、グングン育っていきます。人は、物事を肯定的にとらえ、前向きに本気でがんばることで、自分の中にある可能性を引き出せる、ということを感じさせてくれる気分爽快な一冊です。

ハーバードの人生を変える授業

大阪狭山校 平田先生
タル・ベン・シャハー だいわ文庫

名門校として世界的にも有名なハーバード大学。多数の億万長者を輩出しているハーバード大学の「成功までの道筋をつくる授業」である「伝説の授業」を文庫化した作品です。けれど、決して難しいことは書かれていません。簡単で、大切な、成功するため、幸せに生きるための習慣や心構えが書かれています。

たとえば、「決断すること」という項目では、決断すること、そして、決断し、「失敗すること」の大切さが説かれ、失敗を絶好の機会としてとらえる方法が書かれています。これから多くの決断を、そして多くの失敗をすることで皆さんにこそ読んでほしい作品です。読んで、成功をつかんでください！

ぼうかご探偵隊

下松校 松本先生
倉知 淳(くらち) じゅん) 創元推理文庫

ある朝、いつものように登校すると、僕の机の上には分解された、たて笛が。しかも、部品の一部だけ持ちされていた。五年三組で連続して起きている「なくなっても誰も困らないもの」ばかりが狙われる消失事件。同級生が描いた変哲もない風景画、クラスで人気のない飼育小屋の二つトリ、不細工な招き猫の募金箱。だれが、いつ、なぜ「なくなっても誰も困らないもの」を狙うのか。僕は探偵小説が大好きで独特な考え方の龍之介さんと調査を開始する。

小学校が舞台の推理小説なので、大掛かりなトリックはありません。しかし、きつとこうという展開になるのだから予想しながら読み進めていくと、なんでそんなことに気付かなかったのかという驚きを味わってもらえると思います。わかりそうで、わからない。わかってそうで、わかっていない。そんなミステリーの楽しみを自分の小学校生活を思いだしながら読んでみてはいかがでしょうか。



ロング・グッドバイ

浜寺校 富永先生

作 レイモンド・チャンドラー
訳 村上 春樹 ハヤカワ・ミステリ文庫

「厳しい心を持たずに生きるのはいけない。優しくなれないようなら、生きるに値しない」 主人公である私立探偵、フィリップ・マローウのあまりにも有名なセリフですが、この作品に描かれる彼の生き方は、まさにこの言葉そのものです。

天才的なひらめきや人間離れた洞察力、息をもつかせぬスリリングな展開と全く予期できなかった意外な結末。実はこのミステリーはそんなものとは無縁です。でも、訳者村上春樹は「一枚の大きな油絵を遠くから眺めたり、近くによって細部を眺めたりするみたいに」折に触れては繰り返しこの本を手にとってきたと言います。何度でも触れたい、そのたびに新たな魅力に気づかされる。優れた映画や音楽、漫画もそうですよね。中学生が読むには少し難しいかもしれませんが、世界的な名文家の最高傑作を、ぜひじっくり時間をかけて味わってください。

カラフル

光明池校・和泉中央校 三枝先生
森 絵都(もり) えと) 文春文庫

すでに肉体は死んでしまった魂状態の「僕」。天使のプラプラから、三日前に亡くなった小林真の体の中に「ホームステイ」しろという「ボス」の命令を伝えられる。そこで再挑戦に成功すれば、「僕」は転生でき、失敗すれば一瞬にして魂も消え、真というその少年も死んでしまうという。

真は中学生で、複雑な家庭環境で育ちましたが、高校進学や恋愛に対して、みなさんと同じような悩みを抱えているので、きつと共感できるはず。人の死と再生という、一見重く感じられるテーマを、軽やかに、面白おかしく描いた作品です。

プーのはちみつとS

宮山台校 山田先生
作 A. A. ミルン 訳 石井 桃子 岩波書店

「なぜ世の中にミツバチがいるかっていえばだね、そりゃミツをこさえるためにきまつてるさ。それで、なぜミツをこさえるかっていえばだね、そりゃぼくが食べるためにきまつてる。」

それが当たり前だから。それが普通だから。それでは常識とはいったい何なのか。かの天才アインシュタインは常識とは、十八歳までに身につけた偏見のコレクションである」と言っています。プーには常識がありません。周囲から見れば「バカなクマ」です。しかし、プーは常に疑問を持ち、それを発見につなげていきます。当たり前を当たり前と思わず、一度「なぜ」と考えてみれば、新たな発見があるかもしれません。

願いながら、祈りながら

初芝校 中津先生
乾 ルカ(いぬい) るか) 徳間文庫

北海道の端にひっそりと残る中学校の分校。そこに赴任してきたのはやる気皆無の新米教師。ただ一人の三年生は、「最悪のイベント」、修学旅行をきっかけに孤独を目指す。対して、自称靈感少女、道内トップクラスの学力を持つ悩める秀才、この町の町長の孫……そして、嘘ばかりつく少年、という個性の強すぎるメンバーの一年生四人。全校生徒、五名。

当たり前にいるはずのライバル、先輩や後輩はいない。また、塾なんてなく、家から通える高校はたった一つ。そんな逆境とも言える環境に苦しみながらも、真っすぐ生きる彼らから、本当に大切なものに気づかされるはず。そして、少年はなぜ嘘ばかりつくのか。それを知った時、感涙必至間違いなしです。